文化庁月報

No.501
平成22年 6 月号

CONTENTS

文化の礎 玉井日出夫 文化庁長官鼎談
第７回 ゲスト 佐藤 治男さん●全国文化財壁技術保存会会長
永井 規男さん●建築史家・関西大学名誉教授

地域の個性を大切に （前編）後世へ伝えたい土壁の魅力 …… 4

特集 国民読書年

寄稿
読書の力 国民読書年を迎えて …… 肥田美代子・12

事例紹介
平成２１年度「全国読書フェスティバル in 香南／文化芸術懇談会」イベント報告 …… 高知県教育委員会事務局生涯学習課・19

パネルディスカッション
読書が子どもたちの創造性と表現力をはぐくむ …… 22

連 載

鑑 文化芸術へのいざない 35・36
新国立劇場という場（鵜山 仁）…… 28
ナポリ・宮廷と美（渡辺晋輔）…… 30

いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 99
釧路市立博物館（北海道）…… 32

こどもの文化体験 39
MEET THE MUSIC アーティストが学校にやってくる！
（彩の国さいたま芸術劇場）…… 33

日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保持者編 51
大城義政（手機製作）…… 34

文化交流使の活動報告 67
竹工芸をとおしての文化交流（竹工芸作家・武関翠篁）…… 35

伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 68
吉良川のまちなみひなまつり（高知県室戸市）…… 36

言葉のＱ＆Ａ 3
短編映画「敬語おもしろ相談室」を作成 …… 38

文化庁ニュース
平成 22 年度文化庁文化交流使指名書交付式 …… 39
平成 21 年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）
被表彰者の決定 …… 40
平成 22 年度【公益信託 大成建設自然・歴史環境基金】
助成金募集のご案内 …… 42

イベント案内● 43
新国立劇場スポットライト● 45
７月の国立劇場● 46
芸術文化振興基金ニュース● 47

今月の表紙

紫陽花
撮影：岩崎 明

特集

国民読書年

寄稿

読書の力　国民読書年を迎えて

財団法人文字・活字文化推進機構理事長
肥田美代子

文字・活字文化は、人類が長い歴史の中で蓄積してきた知識・知恵を継承し、さらに発展させていく上で不可欠であるのみならず、読書活動や創作活動等を通じた豊かな人間性の涵養、さらには健全な民主主義の発達に欠くことのできないものであり、ひいては、知的で心豊かな国民生活と活力ある社会の実現に寄与するものです。

文部科学省においては、平成17年7月に議員立法として成立、公布・施行された「文字・活字文化振興法」に基づき、図書館の充実、読書活動の推進、学校図書館の充実等の施策推進など、文字・活字文化の振興を図っています。平成19年10月には、財団法人文字・活字文化推進機構が設立され、学校や地域における読書活動の支援や地域社会の活字文化振興のための活動を行っています。さらに、平成20年3月には子どもが読書に親しむ機会の提供と諸条件の整備・充実を図る「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（第2次）を閣議決定し、文字・活字文化の重要性が高まっています。

また、平成20年6月6日、衆議院と参議院で「国民読書年に関する決議」が採択され、平成22年は「国民読書年」となり、全国で記念行事が行われる予定です。文部科学省においても、関係施策の総合的な推進に取り組み、文字・活字文化の振興に努めてまいります。

●読書文化の継承

「読書の力」は、わずか4文字である。この4文字の中には人類の歴史のすべてが詰め込まれているように思える。社会の出来事や物語を口承した時代においては、それが知恵や技術を継承する力であった。印刷技術が発明され、書物文化がひろく普及するようになってからは、手書きや口承や石盤、皮革への手書きで伝えられていたものが、やがて印刷物で読まれるようになったとき、それまでまったく想像もできなかった知の継承と創造が可能となった。今日、文字・活字はすべての社会活動の基盤となっており、それは無文字社会を除く世界に共通している。

こうした歴史の流れを思いかえすとき、日本人はもっと自国の言葉と文化とに誇りをもつべきであろう、とあらためて思う。自国の言葉や文化に誇りをもつことで、異文化を理解する力や敬う姿勢も生まれるにちがいない。

日本は、ドイツが誇るゲーテよりも、イギリスが誇るシェークスピアよりも、数世紀も早く、世界最古の文学といわれる『源氏物語』を誕生させ、しかもそこで使われたものと同じ日本語を、21世紀のいまも、私たちは使っている。こうした国は、世界にはない、と思うのだが、そうした長い歴史を有する読書文化がこのところ、少々、あやしくなってきた。

ケータイやインターネットなどを通じて、文字文化はかぎりなく間口をひろげている。半面、印刷された書物を読む人口は減少し、書店への集客も希薄なものとなった。これまでの読書環境を大きく変える新しい力が動き出したのだ。

これからの読書活動は、そうした電子メディアと書籍文化の共存を前提に展開されることになる。「読む人」が、両者のバランスをとれるかが試される時代がやってきたのだ。読む行為を楽しんだり、自己形成したり、精神的な成長をとげたりするメディアはどれか、思考力や想像力を培うメディアはどれか、一人ひとりが主体的に選択しなければ、自分自身をまとめることさえ困難な社会が登場したのである。

こうした新たな現実をまえに、我が国の立法府や行政府、民間は、読書文化をどのように継承しようとしてきたのか。2010年国民読書年を機に、私自身が具体的にかかわってきた約20年間のみじかい歩みと、読書活動のこれからの課題について考えてみたいと思う。

●読書環境整備へ動きだす

「子どもの読書活動の推進に関する法律」（01）と「文字・活字文化振興法」（05）は、世界にさきがけて公布された法律であった。2つの法律は、読書環境の整備と言語力の向上を目指すもので、読書に関する法的整備としては申し分のないものとなっている。「子どもの読書活動の推進に関する法律」は、その基本理念のところに、読書活動とは何かについて、次のように書き記している。

「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」。

同法の描く子ども像は「誰とでも対話できる子ども」である。この法律の制定までには長い道のりがあった。参議院議員として仕事をするようになって間もない頃、私の事務所に見えられた知人が「学校図書館がひどい状況にある」と教えてくれた。子どもたちの読む本がないというのだ。

早速、複数の関東地域の学校を訪問し、図書室や図書館を案内してもらった。鍵がかかっていて、開けてもらうと、クモの巣がはり、本棚はほこりがいっぱいのところもあった。「学校図書館は無用の長物ですよ」と、淡々と語る校長先生もおられた。

図書館はそんな冷遇を受けていたのだ。この視察のあと、国会で審議の遡上にのせ、それらの審議の経緯を受け止めて、文部科学省は全国学校図書館の悉皆（しっかい）調査に踏み切ってくれた。1992年のことであった。この悉皆調査は、93年の学校図書館図書蔵書を5年間で1・5倍にするという「学校図書館図書標準」の設定へとつながり、それを達成するために「学校図書館図書整備5か年計画」（93）がスタートしたのだった。これは子どもの読書活動の未来に一条の光を放った。

●法制度・政策の基盤づくり

学校図書館には、本や資料だけではなく、子どもたちに本を紹介したり、相談に乗ってくれたりする水先案内人が必要である。1953年に制定された学校図書館法には「学校図書館に司書教諭を配置すること」（要約）が明記されていた。それなのに司書教諭を配置した学校は皆無に近いものであった。同法の附則に「当分の間、置かないことが出来る」（要約）と書かれていたため、司書教諭をおこうという学校は現れなかったのだ。この附則が学校図書館を「クモの巣城」に貶めた原因でもあった。

この現状を変えようと、超党派の議員で「子どもと本の議員連盟」が創設され、学校図書館法改正に向けた動きがはじまり、44年ぶりに同法は改正され、司書教諭の配置が義

務化された。1997年のことであった。「読書時間があったら、ドリルを勉強しなさい」という教師や親の読書軽視ともとれる世論の風向きを転換するには、世論の喚起が必要であった。1999年に国会で採択された「子ども読書年に関する決議」は、そのような思いから提案されたのだった。

しかし国会決議は、政府予算の裏づけがなく、読書推進に必要な予算を計上するには、法律の制定が欠かせない。「子どもの読書活動の推進に関する法律」の提案に至る経過にはそのようなこともあった。ここまでに10年の歳月がかかった。

法制定に反対する一部の図書館関係者や作家には「本を読まない人間は、法律違反で刑務所に入れる気か」と厳しく批判され、私の事務所にはそのたぐいの葉書やフックスが毎日のように届き、秘書たちを悩ませていた。

他方では、「子ども読書年に関する決議」や「子どもの読書活動の推進に関する法律」の制定をキッカケに「朝の一斉読書に弾みがついた」「乳幼児に絵本を贈る自治体の取組がはじまった」といった声も多数にのぼった。

立法府の取組は、たしかに世論を喚起したのである。文部科学省の「子どもの読書活動推進に関する基本的な計画」(02)とそれに準じた都道府県市町村の読書推進計画の策定は、草の根の読書活動を刺激し、読書活動を財政的に支援する「子どもゆめ基金」(01)の創設は、イベントに講師さえ招く余裕のなかった地域の読書活動に干天の慈雨となって今日に至っている。

●学校図書館の整備充実に向けて

こうした経緯をみると、いかにも順風満帆、どこにも異議申し立ての根拠はないように見えるけれど、改善に向かっているとはいえ、学校図書館の図書も人材も、依然、苦しい事情にある。

「新学校図書館図書整備5か年計画」にもとづく地方交付税は、年間200億円、5年間で1000億円にのぼる。これを自治体が通常の図書館予算(あるいは教育予算)に上乗せすれば、各学校の図書は飛躍的に改善されるはずである。しかし2009年度に全国の市町村が予算措置した学校図書館の図書購入費は約164億円、整備計画と比べるとその約8割にとどまっている。

5年間で学校図書館図書を1・5倍にするという高いこころざしのもとではじめた新学校図書館図書整備5か年計画は、まもなく3期目が終わるが、20年近い歳月が経っても図書標準は達成されそうもない。これは読書環境の整備に関する自治体の熱意の欠如を示している。

図書予算のまずしさだけではない。司書教諭や学校司書の配置についても、政府や自治体の意気込みがほしい。教師と学校司書とが、毎日の授業ですべての教科にわたって連携しなければ、新学習指導要領の「言語活動の充実」を目指す教育はうまくいかないだろう。

小規模校への司書教諭の配置も、読書指導や読書教育の格差をなくしたり、子どもが等しく文化を享受したりする観点からも大きな課題として論議しなければならないときを迎えている。

学校図書館は、よくいわれるように読書を楽しむだけでなく、資料を調べたり、授業を補完したり、学習情報センターの役割がある。司書教諭や学校司書のように、専門知識をもつ人びとはそうした授業活動の全体に必要なナビゲーターなのである。

●読書は好奇心を育てる

いま日本に求められていることは、乳幼児期から文字・活字文化に親しむ子育てや読書教育に配慮することではないかと思う。子どもが人との関係を最初に構築するのは家族である。この人生の出発点こそ、読書活動のワンステップであろう。いろいろな調査で乳幼児の時から絵本や童話をよく読んでもらった子どもは、言葉が豊富で物事に意欲的となり、好奇心が強いということが明らかにされている。

この好奇心こそが、本への入り口をつくる。読書環境の整備の最大の目的は、本を読ませることではなく、本を読もうとする好奇心や、読もうとする意欲を引き出すために必要なのだ。語彙や言葉の習得は、そうした読書の楽しみの結果であり、子どもが自らの力で身につけるものである。

子どもは、やがて家族関係から幼稚園、保育所、駅、病院といった近隣社会へとつながってゆく。子どもたちの集まるところ、いつも「本が待っている」という環境こそ地域の読書環境といえる。

学校の一斉読書だけではなく、幼稚園や保育所でも指導の中軸に、絵本の読みかせや物語の朗読を据えると、きっと幼児教育や子育ては、新たな展開を見せてくれる、と私は思う。「誰とでも対話できる子ども像」は、同時に「人生のすべてにわたる学習の力」を習得することでもあり、それには家庭・地域・学校・職場といった社会全体の強い連携が必要となる。

●読み語りのすすめ

子どもは、文字を読めない年齢のときでも、絵本を読んでもらうのは大好きである。しかし読み語りで子どもを楽しませるには、読んであげる側の親、周りの大人が絵本を楽しまなければならない。嫌々、読んでやると、子どもは敏感に察知してしまい、読んでもらうことさえ拒絶するようになる。

絵本の選び抜かれた美しい言葉を耳から浴び、視覚で絵をとらえ、そうした視聴覚のはたらきが子どもの想像力の翼をひろげてゆく。幼い脳にたくさんの言葉を刻み込み、しらずしらずのうちに、母語の原型を自らの力で育むのである。

「読み聞かせ」の良さは、大人に対する子どもの信頼感を高めるということだ。膝や胸に抱かれて、絵本を読んでもらう赤ちゃんは、身も心もまる投げしているのだ。「自分はいま、守られている」という濃厚な安心感がそうさせるのである。「読み聞かせ」は、子どもにとって至福の一瞬といえる。からだ全体で、すべてを感じ取ろうとする子どものいのちは、私たちの想像をはるかに超えた生命力にあふれている。

絵本を読んでくれる母親の肉声は、赤ちゃんにいちばん安心感を与える。テレビの機械音は一方通行であるから、心を開くことはない。母親の肉声は、胎内で遊んでいたときから馴染み深いものであり、暖かい情感がこもっていて心も開かれる。これが電子メディアと本の違いであり、しかも日本語の使い方までも学びとることができる。教えよう、覚えさせようと考える必要は、まったくない。上手に読もうと思う必要もない。親子で、絵本や童話、物語を楽しむだけでいい。その結果は、将来、子ども自身が出してくれよう。

日本大学総合科学研究所の調査では、親に絵本を読んでもらっているときの子どもは、脳の中でも、喜怒哀楽を生み出す部分が、非常に活発に動いていることがわかった。感性や情緒が刺激されるのである。読み聞かせをする側の脳の「前頭前野」も、活発化していることが、脳科学分野の研究で突き止められている。

「前頭前野」は、思考力や創造力、コミュニケーション、感情をコントロールするといった役目を担う。認知症治療に「読み語り」や朗読が採用されはじめたのも、前頭前野が活性化することがわかったからである。

私も3人の子どもを育てた。子どもに本を読んでやると、同じ絵、同じページを何回もねだった。文字や意味がわからなくても、物語を懸命に理解しようとしているのだ。「もう、さっきも読んだでしょう」などと、大人の論理でイラつかずに、おおらかに付き合うことがコツである。「読み聞かせ」をしてもらうことで、子どもは自分の心を耕し、ひろい世界に自分を遊ばせていて、私はそれが大切なことだと思う。

●読書教育の充実

家庭や幼稚園、保育所において「読み聞かせ」の洗礼を受けた後、こんどはそれを学校における「読書教育」につなぐ必要がある。小学校、中学校、高等学校を通じて、一貫した読書教育を行うことが、生涯にわたって「読む習慣」を身に付ける人間を育てることになろう。

どんな本を読んだらいいのか、戸惑っている子どもは多い。友だちどうしで本をすすめ合うとか、先生の働きかけを待っているのだ。とくに先生方は、教科書を、教科書以外の本との架け橋とし、それをすべての教科で行なうことが期待されている。耳を澄ませば、「本をすすめてくれる人がいない」という子どもたちの小さな声が聞こえるにちがいない。

現在、全国約2万5000校で実践されている朝の読書活動は、子どもに読む楽しさを伝える有効な方法であった。好きな本を自分で選んで読むという自由読書が好感をもたれたから、この20年のあいだに急速に広がったのであろう。その半面では読みやすいものへ、読みやすいものへと流れる傾向を反省する声も聞こえてくる。デザートばかり食べて、主食や副食に手をださないというのだ。次のステップへ歩まないもどかしさを感じているのである。

「自由読書の時間」をカリキュラム化したらどうだろうかと、私は考える。趣味の読書は自由でいい。教育の一環としての読書は指導を必要とする。これは中学校高学年、高等学校へと進むにつれて読書量が減少する現実をどう考えるのかということでもある。読書とは、読書教育とは、読書指導とは、こうしたテーマの論議はもっと深まっていい。深い論議を通じて教育現場における読書教育の姿が見えてくるにちがいない。

●言語の力を伸ばす

文字・活字文化振興法の制定・公布は、私の国会議員としての最後の仕事となった。同法の基本理念は「教育の課程の全体を通じて、読む力・書く力を基礎とする言語力の涵養に十分配慮する」（要約）というものである。「言語力」は「読む・書く・聞く・話す」という表現行為の全体をさす言葉であり、印刷物やインターネットに書かれた文章とか、図表や画像なども含まれる。言語の力はコミュニケーション力の基礎であり、社会を生き抜くための基礎学力とも理解できる。

この法律の制定等を受けて、新学習指導要領は「言語活動の充実」という方針を盛り込んだ。現実の社会にコミットメントしようという文部科学省の熱意は十分に伝わってくる。

毎日、企業の経営者や団体の方々とお会いしてわかることは、入社試験を受けにきた学生のコミュニケーション力の低下が著しいということだ。人事担当役員の一人は「大学時代に一冊も単行本を読んだことのない学生が入社試験にきた」と言っていた。基礎学力に欠けていて、さすがに驚愕したらしい。

企業ばかりではない。東京都は幹部職員を対象とした言語力・表現力を磨く研修会をはじめた。電子メディアの浸透で本を読むことがなくなり、思考力やコミュニケーション力が落ちている、というのが研修の動機のようである。都の調査では、1か月に1冊も本を読まない職員が12％、新聞を読まない職員は25％にのぼっていた。これは高学歴でしかも管理職や管理職に近い職員のアンケート調査の結果である。

読書・活字離れの長期化と、情報手段の多様化は、考える力・自己表現する力を喪失した社会人を大量に生産しつつある。暗記力や知識の量を「人間の知」とする時代はおわった。

我が国の教育は「解答は一つ」ということが大筋では基本となってきた。○×式教育は、それを象徴しているのだが、中高一貫校や私学の一部では、これから卒業する動きもある。この背景には、現実の社会の出来事は「解は一つ」でないということと、○×式教育は効率的な教育ではあるけれど、「考える力を育てる」ことを省いてしまった、という反省があるようだ。新学習指導要領が求める力も「思考力」のようである。「解は一つ」ではない社会を生きるには、予測不可能な変化に対応する新たな力が必要であり、その力の源泉は幅広い読書にあると考える。

●国民読書年について

2010国民読書年は、ある朝、突然、思いつかれたものではなく、これまで述べてきたような日本の教育や社会の現実から生み出されたものであった。私たち文字・活字文化推進機構が07年の創立総会で提唱してから、9か月後に衆参両院は「国民読書年に関する決議」を全会一致で採択した。読書活動推進のために政官民が協力してあらゆる努力をするというものであった。この背景には成人した国民の半分が1か月に1冊も本を読まないことへの危機感があった。1か月とは、読書世論調査が対象とした時間帯であるが、「1か月に1冊も読まない」は、「1年に1冊も読まない」に等しいといえる。そしてその家庭には本棚や本立てというものはないのかもしれない。

「美しい絨毯が床を、高価な壁掛けと絵が壁を飾っていようとも、本のない家は貧しい。そして自分で本を知り、所有し、愛する者だけが、自分の成長してゆく子供たちを理解し、実際の助言を与えることができるし、子供たちが低俗な作品を読むことや一流の文学作品の早すぎるつまみ食いから守り、彼らの若い魂の前に精神と美の王国がゆっくりと展開されてゆくのをともに体験することができる」（ヘルマン・ヘッセ『ヘッセの読書術』岡田朝雄訳、草思社）。

この文章は、ヘッセが「書物とのつきあい」と題して1903年に書いた評論であるが、いまの日本国民へのメッセージとして読むことができるほど色あせていない。

親が読まず、その子も読まないという不読の連鎖を断ち切る道は決して容易なことではないが、同時にたゆみない努力もまた必要である。これは「読者」だけでなく、作者も出版社も根本的なところで問われていることである。

国民読書年を自治体やさまざまな団体や個人が、自分たちの背の高さや実情にあわせて読書活動に参加するいい機会にしたいものと願う。

文字・活字文化推進機構は、すでに09年7月からテレビ、新聞、雑誌、ラジオの4大メディアを通じて「2010年は国民読書年」のキャンペーンをはじめている。新聞社や大学、自治体や企業と連携して、シンポジウムやフォーラムを開催するなどの啓発活動に取り組んでいる。2010年に入ると国民読書年のロゴマークの活用に勢いがでてきた。活用団体は新聞、雑誌だけでなく大学、自治体、図書館、民間企業におよび、ようやく浸透しはじめた感がある。この勢いに棹をさし、2010年10月、東京・上野の森で開催する「国民読書年大祭典」に向け、一段と行動を強め、読書立国への道筋をつけたいと思っている。

2010 国民読書年

国民読書年のロゴマーク
平成21年10月19日にロゴマークとキャッチフレーズ「じゃあ，読もう。」を発表しました。

4月17日開催：国民読書年フォーラム「日本の言葉と文化を未来に伝える―図書館はなぜ必要か」

シンポジウム
「子どもの読書と図書館の役割」
パネルディスカッションでは，図書館の現状や可能性，読書活動や政策活動の指針について，それぞれの立場から体験談を交え語っていただきました。

記念講演
阿刀田高氏「日本の文化を伝えるために―子どもたちの読書環境の重要性―」
講演では，日本特有の言葉の文化と歴史や書物の価値，言葉遊びで培われる力についてなど語っていただきました。

平成22年度おもな活動計画

	おもに国民読書年記念事業 （啓発活動，交流協力事業など）
5月	29日　近畿大学 国民読書年フォーラム （於 近畿大学・主催　近畿大学，活字文化推進会議，文字・活字文化推進機構）
6月	12日　国民読書年フォーラム「言葉の力で人生と未来を拓く」 （於 立命館朱雀キャンパス・主催　京都新聞社，文字・活字文化推進機構） 23日　国民読書年推進会議総会と記念講演会 （於 日本新聞協会） 26日　国民読書年フォーラム （於 名古屋市中区役所ホール・主催　中日新聞社，文字・活字文化推進機構）
7月	4日　国民読書年記念「読書は未来を創る―読書・図書館自治体サミット」（仮称） （於 茅野市民会館マルチホール・主催　信濃毎日新聞社，文字・活字文化推進機構） 24日～26日　「わくわく子ども読書キャンプ」 （於 国立オリンピック記念青少年総合センター・主催　国立青少年教育振興機構，文字・活字文化推進機構）
9月	国民読書年シンポジウム「社会人の言語力向上をめざす」（仮称） （於 福岡・主催　西日本新聞社，文字・活字文化推進機構）　※予定
10月	23，24日　国民読書年記念大祭典 （23日於 旧奏楽堂，24日於 国立博物館・国立科学博物館）

事例紹介

平成21年度「全国読書フェスティバル in 香南／文化芸術懇談会」イベント報告

高知県教育委員会事務局生涯学習課

はじめに

高知県では、次代を担う子どもたちを心豊かに育てることを目的に「地域や社会全体で子どもの読書文化の定着や風土づくり」を積極的に推進し、「子どもの読書活動推進」についての県民意識の醸成を図るとともに、市町村・PTA・関係機関などの協力を得て県民運動にまで高めるために、平成19年度より「全国読書フェスティバル」を開催しています。

本県の地形・地域性（東西に長く、中山間地域が多い）を考慮し、平成19年度は県中央部に位置する高知市、平成20年度は県西部の四万十市、平成21年度は県東部の香南市で開催しました。

平成19・20年度は文部科学省地域フロンティア事業の委託を受けての開催でしたが、平成21年度は県の「高知県子ども読書活動推進総合事業」により、文化庁による文化芸術懇談会と共催での開催となりました。

平成21年度「全国読書フェスティバル in 香南／文化芸術懇談会」の開催に向けて

7月に高知県子どもの読書活動推進総合事業実行委員会が組織化され、フェスティバルに向けての取組がスタートしました。この実行員会の特色は、高校生大学生部会の活動にあります。県内の大学生・専門学校生・高校生25名で組織されたこの部会は、メインホールや展示・体験ゾーンにおける開催イベントの企画運営を行いました。

来場者を迎える学生スタッフ

25名の高校生大学生を
・「つづきの創作コンクール・朗読」チーム
・「ありがとうプロジェクト」チーム
・「本のマーケット」チーム
・「絵本キャラクター・ジブリグッス販売チーム」
・「スタンプラリー・全体運営チーム」

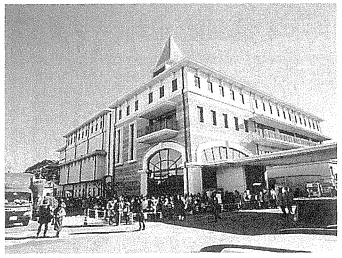
の5グループに分け、10回を超えるグループ会や部会を開き準備を重ねました。さらに、フェスティバル当日は過去2回のフェスティバル

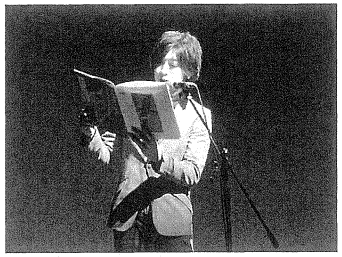
でこの高校生大学生部会で活動し、社会人となっているOB、応援スタッフとして約30名の高校生や大学生も参加し、60名を超える学生スタッフがフェスティバルの運営を支えました。

全国読書フェスティバルin香南／文化芸術懇談会

平成22年1月24日（日）に高知県香南市のいちふれあいセンターで、下記の内容で「全国読書フェスティバルin香南／文化芸術懇談会」が開催されました。

◆メインホールイベント
・オープニングセレモニー
「高知香南ジュニアオーケストラ演奏」他
・小野大輔（声優）朗読
・つづきの創作コンクール優秀作品発表
・ありがとうプロジェクト発表


会場の「のいちふれあいセンター」
左の赤い車は講談社「おはなしキャラバンカー」


朗読をする小野大輔さん

・井上あずみ（歌手）読み聞かせコンサート
・文化芸術懇談会

◆展示・体験ゾーン
・講談社キャラバンカー
・巨大絵本展示
・絵本キャラクターグッズ販売コーナー
・小砂丘賞展示
・本のマーケット（古書販売）
・読書楽力検定コーナー
・「高知県の中学生が贈る133冊コーナー」
・県立図書館「絵本おはなし宝箱」コーナー
・県立文学館「おはなしキャラバン」
・県立美術館「おはなし美術館」
・高知こどもの図書館「バリアフリー絵本展」
・スタンプラリー

◆学習ゾーン
・「子どもたちと絵本の扉をひらく」講師：正置友子
・「えほんは幸せのとびら」講師：森本智香

フェスティバルには、高知県出身の人気声優小野大輔さん、となりのトトロ等スタジオジブリ作品の主題歌の歌手で有名な井上あずみさんが出演するということで、事前に入場制限をしなければならない状況になりましたが、全国27都道府県から2500名を超える来場者があり、メインホールのみならず、展示・体験ゾーン、学習ゾーンも終日多くの人であふれました。

今後に向けて

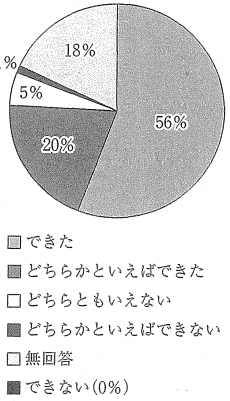
当日の参加者のアンケート結果から、子どもの読書活動推進に向けて県民意識の醸成を図ることができ、当初の目的は達成できたと思われます。

また、こういう活動の中で、青少年自らが主体となり子どもの読書活動を推進することによる効果が大であるということが、過去2回のフェスティバルにおいても実証されており、青少年を主体とした取組が今後も必要です。

今年度は、県内の読書環境の厳しい17地域に配置している「子どもの読書活動支援員」を中心に、17地域を5ブロックに分け、地域の実情に応じた「親子で本を楽しむ日」というイベントを8月～11月、全県読書フォーラム（仮称）を12月に開催予定でありますが、地域の読書関係者のみならず、青少年が企画の段階から主体的に参加できるイベントにしていきたいと考えています。

アンケート結果より

1　あなたは今日のフェスティバルに参加して、子ども読書推進の大切さについて考えることができましたか。



2　フェスティバルに参加しての感想

（高知県南国市　女性　33歳）
正置先生の講座に参加しました。もし小さい頃にもどれたらと願うことがあります。それは、今より良い何かをできるのにと思うから。もちろんもどれないのですが、気付いた思いを子どもたちに伝えることで、子どもにもどるのと同じくらいだいじなものを体験できるのではないかなと思いました。思いを伝えていきたいと感じました。

（奈良県橿原市　女性　26歳）
小野さん目的で参加させていただきました。小野さん単独での朗読はあまり生で聞く機会がないので、このような場を作っていただいてありがとうございます。そして、小野さん以外の方のお話し等々を聞かせていただいて、ああ、私も本読んでいないなあ……と思いました。どちらかというと活字は苦手なのですが、帰ったら読書してみようと思っております。本はTVやマンガとちがって、言葉を感じ、想像ですものね。大切なことだと思いますが、ついつい離れてしまっているので反省です。

（高知県香南市　女性　21歳）
今、福祉について勉強しています。文化芸術懇談会で感じた読み聞かせの大切さを生かして学習していきたいと思います。相手のことを考え、想像して対応していくこと、これはどの分野でも同じことですから。

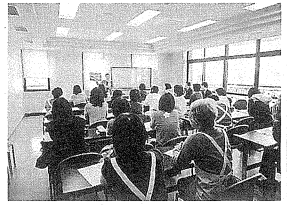
（高知県土佐市　女性　15歳）
読み聞かせの大切さがよくわかりました。本を読むこと、想像力をふくらませるということがだいじだということを再確認することができました。私が小さい頃、母もいろんなことを考えながら本を読んでくれたのかなと思いました。

（京都府宇治市　女性　33歳）
文化芸術懇談会、ほんとうに勉強になりました。4歳と8歳の息子に、帰ったら早速「読み聞かせ」をします。正置先生のお話が素敵でした。あんな母、女性を目指します！参加したきっかけは小野さんでしたが、高知県に来られてほんとうに良かったです。ありがとうございました。

（高知県四万十市　女性　68歳）
高校生や大学生があちらこちらで活躍し、イベントを支えているのに感動しました。「最近の若者は……」という言葉をよく聞きますが、こういう若者を見ると安心します。イベントの内容も良かったですが、私はこういうところがもっと良かったです。

本のマーケットも人であふれています

お話の部屋も人であふれています


読書に関する連続講座も大盛況

早ね早おき朝ごはん運動啓発キャラクターも参加

パネルディスカッション

読書が子どもたちの創造性と表現力をはぐくむ

平成22年1月24日（日）に文化庁と高知県教育委員会の共催で行った文化芸術懇談会では「読書が子どもたちの創造性と表現力をはぐくむ」と題しパネルディスカッションを行いました。尾崎美樹氏がコーディネーターを務め、声優の小野大輔氏や玉井長官など4名のパネリストを迎えて、それぞれの体験や活動からの幼児期の読書の大切さや、国民読書年にあたっての思いや展望について語っていただきました。

司会　コーディネーターは尾崎美樹さんです。尾崎さんは、元RKC高知放送のアナウンサーで、4年前からフリーとして活動されています。今は2歳の男の子のママでもあります。『ママアナお話隊』を結成し、日ごろから絵本の読み聞かせをされています。それでは尾崎さんお願いします。

尾崎　はい、ありがとうございました。今、紹介していただいた、『ママアナお話隊』というのを3か月前に、RKC高知放送の長谷川恵子アナウンサー、花房果子アナウンサーと私の3人で結成しました。この3人は今ちょうど2歳、1歳の子どもを育てているので、そこから結成の話になり、月に一度絵本の読み聞かせなどをしています。

今日はパネルディスカッションをしながら、もっともっと絵本や本に親しむことができるようなヒントをみんなといっしょに考えていきたいなと思っています。どうぞ、よろしくお願いします。

尾崎美樹氏

○パネリスト

森本　智香（えほんの店コッコ・サン　経営）

正置　友子（絵本学研究者・関西学院大学非常勤講師）

小野　大輔（声優）

玉井日出夫（文化庁長官）

○コーディネーター

尾崎　美樹（フリーアナウンサー）

森本智香氏

それでは本日のパネリストの皆さまから、それぞれの読書や本のかかわりについて、自己紹介も含めましてお願いいたします。まずは高知市内で『えほんの店コッコ・サン』、木に包まれたとても居心地の良い空間なので私もよく行くのですが、そのお店を運営されています森本智香さんです。よろしくお願いします。

森本　私は、自身の子育ての間に絵本と出会いました。そしてずいぶんと助けられました。20年くらい前の話ですが、子育てまっさかりのころ、フルタイムで仕事をしていました。育児休暇などの制度もまだ整っておらず、大変忙しくてイライラすることも多かったのですが、夜寝る前の5分間、絵本を読む時だけは優しいお母さんでいたいという風に思って絵本を読んでいました。子どものために読んでいた絵本でしたが、気がつくと自分がいちばん助けられていたなぁというのが感想です。そして、絵本を使って楽しむことを広めたいと思い、11年前に『えほんの店コッコ・サン』をオープンしました。お店では、月曜日と土曜日、それと水曜日の3回、無料のお話会などを開催しています。

最近は、高等学校や幼稚園など、いろんなところで絵本を読ませていただいていますが、ほんとうに子どもたちや聞いてくださった方から喜びの声を多くいただいて、とても幸せな時間をおくっています。本日はどうぞよろしくお願いします。

尾崎　自分が助けられたというのは、私もすごくわかりますね。

それでは続けてご紹介させていただきます。絵本学研究者で現在関西学院大学非常勤講師も勤めていらっしゃいます正置友子さんです。よろしくお願いします。

正置　今日はよろしくお願いします。私は、本を読むことは生きること、生きる力を育むことだと思っております。本を読むことは、現実世界の追体験をすることで実際の体験には劣ると言う人もいらっしゃいますが、たぶん、そういう方はほんとうの本の世界を味わったことがないからではないかなと思います。

私たちにはたった一つの命しかありません。たった一回の人生しか生きられません。そして、空間的に「あの場所に行きたい」とか、時間的に「あの時代に行きたい」と思っても、ひとつの時空間「この場・この時」しか生きることができません。しかし、本の世界、想像の世界では生きることができます。このイマジネーション、想像の力が現実の世界では、クリエーション、創造の力になり、生きる力になると私は信じております。

もっと今のうちに、幼い子どもたち、中学生にも大学生にも本を読んでほしいです。それは人生に生きる力を与えてくれるものになるのではないかなと思っております。子どもたちにそのような人生の友を紹介することが大切なことだと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

尾崎　本を読むと生きる力までほんとうに湧いてくるんですよね。今日はその生きる力を皆さんにお届けする本の朗読を聞かせてくださった方がいます。宮沢賢治『よだかの星』を朗読してくださいました、高知県佐川町出身の声優、小野大輔さんです。

小野　よろしくお願いいたします。僕は声優という立場で、声を出すという役割を担って

正置友子氏

いるわけですけれども、読書、活字を読むということは、役者という目で見ると実はとても大切なことなのです。ほんとうにうまい役者さんだなと思う人は、声が良いのは声優として当たり前だと思いますが、耳が良い人が良い役者さんだと僕の師匠である先生に教わったことがあります。つまり、相手のせりふをよく聞く。そして、相手のせりふが果たして何を言っているのか把握する。そして、自分のせりふに生かす。これができる役者さんでないとうまくいかないということを聞いたことがあります。

それは突き詰めていくと、「耳が良い人は文章の読解力がある人」ってことなんですね。だからすでに台本を読んでいる時点で、相手が何を渡してくるかっていうのを想像している。相手が何をしてくるか、じゃあ自分はこうしようというイマジネーションを膨らませて準備できている人だと思うのです。だからあらためて自分が読書をする力、読解力

小野大輔氏

というものをだいじにしなければいけないと思っています。自分が子どもの頃は本を読んでいたのかなと思い返し、実際どうだったのか母に聞いてみたら、どうやら一度受け取った本を、僕は何回も読んでいたみたいです。僕がいちばん好きな絵本は『百万回生きたねこ』なのですが、今でも何回読んでも泣いちゃうんですよね。それこそ百万回読んでも泣いちゃうんじゃないでしょうか？　でも、その『百万回生きたねこ』も自分一人で読んでいた時間が長かったんじゃないかと思うんです。朗読をする時っていうのは、発信する方がしっかり渡してあげれば、それをどんどん膨らませて何回も何回も読んで自分の大切な宝物にするのではないかなと、自分をかえりみた上であらためて思いました。

これからも声優として、その一期一会の精神、一回で相手にものを伝えるということをだいじにしていきたいなと思います。相手に伝えるためには自分が本を読んで、そこからいろんな知識を得て相手に渡していけるようになりたいと思ってます。

尾崎　声優としての貴重なお話を聞かせていただきたいと思います。よろしくお願いします。それでは続きまして、文化庁長官玉井日出夫さんです。

玉井　よろしくお願いします。私もいろんな本を読みますが、小さいころを思い返しますと、絵本をよく読んでもらった記憶があります。それから小学生のときには、『世界文学全集』といった本が当時結構あり、よく読んでいました。したがって、入ってくる情報というのはやはり活字だったんです。もしくは、ラジオですね。ラジオを聴いて想像力をかき立てるそんな時代に私は育ちました。

実は私の個人的な趣味は俳句で、大学生のころからずっと続けておりますが、私はわりと語彙は豊かだと思います。それはたぶん、小さい時から本を読んで育ったということが今の大切な糧になっているのではないかと思います。

そして、大切なことは読書をするということ自体ではないと思います。だいじなことは読書を通じて感性を育むことであり、それから人の話を聞く、あるいは語りかける、それも感性でありまして、せんじ詰めれば、コミュニケーション能力を養うことだと思うんですね。しかし、最近はどんどん生活環境が変わってきています。三世代同居ではだんだんなくなってきていますから、おじいちゃんおばあちゃんと離れてしまっている。ご家庭で兄弟姉妹がたくさんいる時代とは違ってしまい、また近所に子どもがいなくてあまり遊ぶ友達も少なくなってきている。自然だって豊かではない。そういう周りが変わってしまった中で、我々は失ってきたものがたくさんあるのではないかと思います。失ってきたものをどうやって補っていったらいいのか、その答えの大きなヒントは読書であり、読み聞かせであると思っています。

幼児期の読書の大切さ

尾崎　まずは、幼児期の読書の大切さについてご意見をうかがいます。

正置　私は子どもたちに絵本を読むのではなくて、子どもたちといっしょに読んでいるのだなと感じて読んでいます。ただ本を子どもに買っておいて想像力が育つとか、表現力が育つわけではないと思います。やはり誠実な思いをもったおとなが子どもたちに読むことで子どもたちに伝わっていく。そういう関係性が非常にだいじだと思っています。

小野　最近、本屋さんに行くと、絵本コーナーに行ったりします。そこで見ていると、これはずっと普遍的に残っていくんだなという本がいっぱいあったんです。子どものころに読んでいた『はらぺこあおむし』とか『グリとグラ』ですね。読み聞かせをしてもらったかどうかはあまり定かではありませんが、でも、その本に関する記憶があるってことは確実に読んでくれていたからだと思います。不思議なことに全部ストーリーを思い出すんですよ。タイトルもその表紙までも。だから不思議なタイムカプセルだなと思いました。

読書離れの原因

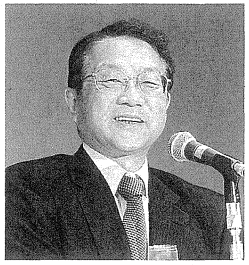
尾崎　先ほど玉井長官からもご説明がありましたように、少しずつ読書離れが進んで、家庭の中で、地域の中で読む時間が少なくなっているということが現実にありますが、何が原因なんだろうと思われますか？

正置　読書離れっていうことが始まったのは、だいぶ前だろうと思います。先ほどの小野さんの耳がだいじというお話で思ったのですが、聞く力と、そしてその聞いたものを抱きしめる力が必要で、抱きしめておく時間、それがなくなった。読んでもらうのはまずそれはそれとして、読んでもらった後、それを自分の中で反すうする時間、そういうものがだいじだと思います。

尾崎　やっぱり情報がどんどんきてるってことが問題になっていると思いますが、玉井さんもその辺りは危惧されているところですよね。

玉井　日本ではコンピューターを電子計算機と訳してますが、中国語では「電脳」、電気の脳みそ、と訳してます。このように読んで字のごとく、コンピューターの世界、情報化っていうのは、脳の代わりをして、脳を補う世界。これは良い悪いは別として、今までとは違う情報化の世界に入ってしまったということですね。

森本　一度体験したことを反すうして膨らませていく力がなくなったんだという風に先程正置さんがおっしゃいましたが、そのことについて個人的な体験があります。実は私の娘の話で恐縮ですが、彼女が年長さんだったか、1年生だったときに、ロシアのマトリョーシカ人形が出てくる絵本を読み、すごくマトリョーシカ人形がほしくなったのですが、今では雑貨屋とかにもありますが、当時はなかなか手に入れられなかったんです。それでも彼女は相当ほしかったらしいんですね。私が仕事から帰ってきたら、すごくうれしそうに玄関を開けて楽しそうな顔をしてるんです。そして、タンスをパカッと開けて、中から紙コップを出してきたんです。その紙コップにいっぱいマトリョーシカの絵が描いてあって、カパッと開けるといろいろ出てくるようになっているんですね。絵本を読んで、目の前の紙コップを使ってお手製でマトリョーシカ人形作っちゃったことがありました。ちょっと自分の娘ながらすごいなと思い


玉井日出夫長官

ました。

尾崎　すごいですね。

森本　そういう力をすごく絵本からもらったんだなって思います。最近は、そういうものを考えられる時間とか想像力がちょっと少なくなっているのかなと思います。

尾崎　そうですね、私も読むときに、タタタタっと適当に読んじゃうと、子どものなかで何かわからないみたいですね。そこでちゃんといろいろ付け加えて読んであげると、なにか考える顔して、次のページをめくろうとすると「待って」って、「めくらないで」って手を握ってくるんです。だいじなことを受け止めて、そういう風に想像力を働かせてという間が大切なのかなと感じますよね。

　会場に来てくれているお母さん、これからお母さんになるであろうという方もいるので、どんな風に読んであげればいいのか、小野さんから教えていただけますか。

小野　友達の家に遊びに行ったときの話ですが、『グリとグラ』を読んであげることになったときに、キャラクターをかなり強調して読んでみたんです。グリとグラの声を極端に変えて。グリは普通に、『グリ』。グラは低い声で、『グラ』（会場笑）。

　赤がグリで、青がグラだったと思いますが、グリは女の子か、ないしはちょっとやんちゃでおませ。青のグラの方は男の子。こんな感じでやってみたらどうなるんだろうと。そしたら大受けでした。

尾崎　そうでしょうね（笑）。

小野　その後に聞いてみると、僕が帰った後もやっぱりすごく読んでいるらしいんです。まさに物語を抱きしめている。抱きしめるってすごくいい言葉ですよね。

尾崎　すてきな言葉ですよね。

小野　その実感っていうのがだいじなのかなって思います。どれだけ子どもの気持ちを引きつけられるかですよね。

尾崎　いろいろとご意見をうかがいましたけれども、まさに問題点もあり、ああしたらいい、こうしたらいいという意見もありました。一つには家庭の中での読書環境というのが重要かなと思います。森本さんのお店には、多くのお母さんや子どもたちが来られると思いますが、お母さんや子どもたちに「絵本を読む時こうしてね」とか伝えていることってあるのですか？

森本　そうですね、活字離れと言われていますけれども、実は子どもたちは本が大好きなんだという実感を私はもっています。お母さま方には、子どもは本が大好きなんだということをいちばん感じてもらいたいと思っています。そういう気持ちも込めて読み聞かせをしています。

尾崎　やはり活字嫌いというのは、何となく先入観として大人がそういう風に決めつけているところもあるかもしれないということですね。玉井さんはどう思いますか。

玉井　すごく大切なお話だと思いました。結局我々を含め、周りの大人、周りの人間がどういう風に子どもたちに接していくのかというのをもう一度考え直さなきゃいけない時代に入っているのだろうと思います。

まとめ

尾崎　まとめに入らせていただきたいと思いますが、それぞれの問題点に関しては、家族で、そして周りの大人がとにかく子どもは本が好きなんだよという思いをもって伝えて、そして身近なところに本を置いてあげることがだいじであると思います。その中からいろんな心を育ててあげることもできるし、当然良いこと悪いことの分別もつくられるというお話が出ました。

　それでは皆さまにそれぞれ一言ずつ、こうしたらいいなと思っていらっしゃることや、今年は国民読書年ですので、そういったこともふまえた上でのご自身の抱負でもかまいません。ご意見を順番にお聞かせください。

森本　先日、お寺の方の意向で絵本を読む機会がありました。その聞いてくれた方から手紙をいただきまして、とても感激しましたので少し紹介させてください。

「コッコ・サンから絵本を読んでもらって幼いころにかなりたくさんの本を読んでもらったことを思い出しました。ある1冊の絵本では読み聞かせを通じて、なぜか感慨深く悲しい気持ちになったのですが、絵本は心にストレートに訴える強い力があることに驚いてしまいました。いつか親になった際には、子どもが楽しく喜ぶ顔をいっしょに楽しみたいと思います。」という手紙をいただきまして、絵本が子どもにも大人にも影響力が強いんだなということを本当に感じました。

　今年は国民読書年ということで、読書に関するきっかけになり、それがたくさん広まればいいなと思います。多くの本というものを身近に感じて、受け入れるようなそんな一年間になればいいなと思います。

正置　私の願いは図書館の充実、公立図書館と学校図書館の充実です。図書館というのは、人を作る、未来を作る場だと思います。未来に生きてゆく人たちが自分の生き方を考える場としての図書館の設置をお願いしたいのです。私たちのやらなければいけないことはそこにあると思います。

尾崎　ほんとうに正置さんのお話の仕方を聞いていると、そっと私たちにだいじに話しかけてくださっているなというのがわかって、こういう本の読み方、話し方がとても心に響くんだなと感じながらお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

小野　やはり読み聞かせは、どう読むかというところではないと思うんです。うまいとか下手とかそういうところに意味合いは実はないのかもしれない。どういう方法をとるのがいちばん良いかではなくて、何を思ってそう読むのかがだいじで。きっとお子さんによっても変わるでしょうし、エンターテインメントにして読むと「きゃっきゃっ」と喜ぶ子もいれば、静かに読んだ方がぐっと聞いてくれる子だっている。それはやはり僕がこの仕事をしていて、感じることなんですけれども、すごく反応してくれるお客さんもいれば、静かに聞いていらっしゃるお客さんもいる。でも、心はそこにある。

　僕もそこを外さないようにしていきたいなと思いました。「朗読」という言葉より「読み聞かせ」の方がすごく好きなのもそれでなのかなと思っています。今日、初めて皆さんの前で読み聞かせをやらせていただきましたが、僕ら声優という仕事は、スタジオで収録するものがほとんどです。CDに吹き込んで、そのCDを大多数の方に聞いていただく。ほんとうに広いレンジで活動しているんですけど、今日、読み聞かせをすることによって相手に渡すということを再認識しました。これを機会に、いろんなジャンル、いろんな人の前で、読み聞かせをしていきたいなと思っています。

尾崎　ぜひ、次の機会も高知に帰ってきていただいて、読み聞かせをしていただきたいと思います。では最後に玉井さんお願いします。

玉井　ほんとうに今日参加できたことに感謝しております。今回のような読書について語り合う機会、環境を作ることが重要だと思っています。それぞれの努力と同時に、やはり環境ができないとなかなかうまくいかないと思います。同時にもう一つあると思うんですね。朝の読書についてですが、学校では朝の読書を当たり前にほとんどの学校でやり始めていますが、この始まりというのは、昭和63年、千葉県の高校のたった2人の先生が始めた運動がきっかけだったんです。その2人の高校教師が「何で本を読まないんだ、何でこんなに活字離れなんだ、自分たちでやろう」と起こした運動が今ではこういう朝の読書活動になっています。ですから、こうやって今日お会いできた皆さま方には、それを大切なことだと思って、とにかく実践していただきたいと思います。それがきっとまた大きな輪に広がっていくのではないかと思いますので、ぜひお願い申し上げます。

尾崎　それぞれの立場でほんとうに貴重なご意見をありがとうございました。

●7月号予告

◆長官対談◆
【文化の礎】玉井日出夫文化庁長官鼎談後編
佐藤治男氏　全国文化財鑒技術保存会会長
永井規男氏　建築史家・関西大学名誉教授

◆特集◆
「改定常用漢字表」に関する答申
文化政策部会審議経過報告
特別史跡平城京跡第一次大極殿復原工事（復原整備）

◆連載◆
【鑑 文化芸術へのいざない】
学生を対象とした歌舞伎鑑賞教室「歌舞伎のみかた／新古演劇十種の内　見替座禅」（国立劇場）
「仏道の道」（東京国立博物館）
【文化人の気魄】
室瀬和美・漆芸作家
【いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート】
神戸市立博物館
【こどもの文化体験】
順調です！　全国高総文祭みやざき2010
【祭り歳時記】
薩摩の水からくり
【文化交流使の活動報告】
伊部京子・和紙造形家
【著作権トピックス】
私的使用目的の違法配信からのダウンロード違法化
【言葉のQ&A】
尊敬語と謙譲語Ⅰの混同の問題①
など

◆文化庁ニュース◆
平成22年度著作権セミナーの開催
など

<お詫びと訂正>

本誌平成22年5月号記事中に以下の誤りがございましたのでお詫びして訂正いたします。

●長官対談　文化の礎
8頁　第1段19行目
（誤）効率化や
（正）効率や
15頁　第4段19行目
（誤）賞（ぐく）の目
（正）賞（す）の目

編集後記

今月号では、「国民読書年」と題して、財団法人文字・活字文化推進機構からの寄稿と、平成22年1月に開催した、高知県全国読書フェスティバルのイベント報告を掲載いたしました。この高知県での読書フェスティバルのイベントは平成19年度より開催しており、今回が第3回目、また、文化庁が都道府県といっしょに開催している文化芸術懇談会は平成14年から開催しており、今回が第41回目でした。今回は両イベントのコラボレーション企画として開催した次第です。合同開催のテーマは高知県が推進している「子どもの読書環境推進」と文化庁が推進している「文字・活字振興」を共有し、「読書が子どもたちの創造性と表現力をはぐくむ」といたしました。イベントを開催するにあたりご尽力いただきました、高知県教育委員会や読書フェスティバル実行委員会の皆さまをはじめ、今回の執筆にご協力いただきました皆様方に心から感謝申し上げます。

（政策課員）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは，

A　京都国立近代美術館
「Trouble in Paradise／生存のエシックス」
5組（ペア）

B　国立新美術館
「マン・レイ展　知られざる創作の秘密」
2組（ペア）

C　京都国立博物館
「没後200年記念『上田秋成』」
2組（ペア）

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ，6月25日（金）までにご投函ください（当日消印有効）。

＊チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では，ホームページで，文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見，文化庁月報の感想などを，ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報　6月号（通巻501）

平成22年6月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2
発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
電話　編集　03-6892-6527
販売　03-6892-6666
フリーコール　0120-953-431
URL：http://www.gyosei.co.jp
印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち，意見にわたる部分については，筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは，直接弊社の本・支社，あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部広告担当
電話03-6892-6589（ダイヤルイン）
2010 Printed in Japan　ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。